

平成二十九年 度

渋谷教育学園渋谷中学校 入学試験問題

国 語

※ 解答は、必ず解答用紙の指定されたところに記入しなさい。

※ ○○字で、または○○字以内で答えなさい、という問題は、「。」「や」「、」「かっこ」なども一字と数えます。

— 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「ドイツの地質学者リーデンプロック教授とその助手である甥の「私」（アクセル）は、アイスランドの火山の火口から「地球の中心」を目指して、現地で雇ったガイド（ハンス）とともに地底探検の旅に出た。地下深くで「私」は叔父たちからはぐれて道に迷ってしまう。ランプがこれれ、暗闇の中で極度の混乱におちいった「私」は壁にぶつかったりころんだりしながら走りつづけ、力つきて意識を失った。」

意識が戻ってきた時、私の顔は濡れていた。だが、それは血ではなく、涙だった。何も見えないし、何も聞こえない。私はただぼんやりと、地面に横たわっていた。それから、どのくらいそうしていただろう？ 私にはわからない。時計が見えないので、もう時間を知る方法がないのだ。私はすべてのものから見捨てられてしまった。これほどの孤独はかつて誰も味わったことがなかっただろう。

倒れたあと、私は多くの血を流していた。身体じゅうが血でべとべとしている。ああ、どうして、あのまま死んでしまわなかったのだろう！ 私は思った。自分はまだ、これから死ななければならないのだ。それ pensando、恐怖が襲ってきて、もう何も考えられなくなった。私はあらゆる考えを追い払った。だが、それでも恐怖は去らず、苦痛のあまり、私は反対側の壁までころがっていった。

そのうちに、また意識がだんだん遠くなっていた。身体もどんどん弱っていくような気がする。もう限界だ。そう思った時、突然、地面を揺るがすような大きな音が鳴り響いた。音は壁に反響しながら、だんだん小さくなっていき、やがて地下道の奥に消えていった。それは雷鳴に似ていた。

いったい、どこから聞こえてきたのだろうか？ 私は心のなかでつぶやいた。おそらく、この花崗岩の壁の向こうで何かが起こったのにちがいない。ガス爆発か、あるいは落盤か。その音が岩のなかを通ってきたのだ。

私は耳をすませた。また、同じ音が聞こえてくるのではないかと思ったのだ。そのまま十五分が過ぎた。だが、音は何もしない。自分の心臓の音さえ、聞こえてこない。地下道は静まりかえっていた。

両手をついて起きあがると、私は何気なく壁に耳をつけた。すると、どこか遠くのほうから、言葉のようなものが聞こえてきた。ほとんど聞きとれないような小さな声だったが、誰かが話しているような気がする。セシジを戦慄が走った。

「幻聴だ！」私は考えた。

いや、そうではない。もう一度、注意深く聞いてみると、それは現実の話し声だった。だが、おそらく身体が衰弱して集中力に力をつけているせいだろう、何を言っているかまではわからなかった。それでも、話し声であることはまちがいない。その点には確信があった。

だが、仮に話し声としても、それは自分の声がこたまになって返ってきただけではないのだろうか？ 私は自分の知らない間に、何かぶつぷつと話していたのではないか？ その可能性は否定できない。そこで、私は今度はしっかりと口を閉じて、また壁に耳をつけた。声はやはり聞こえてきた。

「まちがいない！ 誰かが話している！ 話している！」

そう思うと、もつとはっきり聞こえる場所はないかと、私は立ちあがって、二、三步、先まで行ってみた。そこで、また壁に耳をあてると、声は少し大きくなった。まだ何を言っているかはわからないが、単語のようなものも聞こえる。言ってみれば、誰かが声をひそめてつぶやいているのを聞いている時のような感じだ。そのなかで、「フルーラッド」という単語だけは何度も聞こえた。その言葉はいつも沈痛な口調で発せられた。

「いったい、どういう意味だろう？ 誰が口にしたのだろうか？ 叔父か、ハンスか。そのどちらかに決まっている。だが、もしふたりの声が私に聞こえるのであれば、私の声もふたりに聞こえるのではないだろうか？」

そう考えると、私はありったけの力をこめて叫んだ。

「助けて！ 助けて！」

それから、また壁に耳をあてて、返事を待った。暗闇のなかで……。はつきりした言葉か、少なくとも「おお」という嘆声か何かが聞こえないかと思つて……。だが、そういつたものは聞こえなかった。そのまま、数分が過ぎた。どうしてだろう？ どうすればいい？ 頭のなかに、さまざまな考えが駆けめぐった。私は自分の声が弱すぎて、ふたりに届かないのだと思った。ふたりはこの壁の向こうのどこかにいるはずなのに！

「でも、あれはふたりの声にちがいない。地下百二十キロメートルにいる人間は、ほかには考えられないのだから……」

そう心のなかで繰り返すと、私はまた壁に耳をつけて、ふたりの声を聞きはじめた。耳の位置を細かく変えて、いちばんよく聞こえる場所を探る。と、また《フルーラッド》という言葉が耳に入ってきた。そして、またあの雷鳴のような音が鳴り響いた。ドーンと大きな音がして、そのあとには壁に反響する音が続く。その瞬間に、私ははたと思いあつた。

「そうか。さっきのあの音。あの音は、壁の向こう側から聞こえてきたわけじゃないんだ。この壁は花崗岩でできている。だとしたら、かなり大

きな爆発音でも、中を伝わりにくいはずなんだから……。声だつてそうだ。いや、声なら、なおさらだ。音は岩を抜けてくるんじゃない。地下道を直接通ってくるんだ！ この地下道のなかには、何か特別な音響効果おんきょうが働いているんだー

そう思つて、もう一度、神経を集中すると、今度は話し声のなかに、はっきりと私の名前が聞こえた。あらためて聞くと、声は壁の向こうからやつてくるのではなく、地下道の空間を伝わってきているようだった。

私の名前を口にしたのは、たぶん叔父だろう。叔父はハンスと話していた。会話のなかに何度も出てくる※《フルーラッド》という単語はデンマーク語だ。だが、とりあえず、そんなことはどうでもいい。私はやみくもに大声を出すのではなく、壁に近づいて声を出すことにした。声はきつと、この壁沿いに地下道のなかを進むのだ。壁はおそらく電線のような役目を果たしているのだろう。

だが、ぐずぐずしている暇ひまはなかった。ふたりが今、いる場所から離れてしまえば、声を伝える音響効果が失われてしまうかもしれないからだ。私は壁に口を近づけると、できるだけはつきりと言った。

「叔父さん！ リーデンブロック叔父さん！」

そうして、激しい不安にさいなまれながら、返事が戻ってくるのを待った。音はそんなに速くは届かない。気圧があがっても、音の速さは変わらない。ただ、はつきりと聞こえるようになるだけなのだ。⁽³⁾数秒が数世紀のように感じられた。そして、かなりの時間がたったあと、ようやく私の耳に叔父の言葉が届いた。

「⁽⁴⁾アクセル！ アクセル！ おまえか？」

「そうです！ そうです！」 私は答えた。

(間……)

「かわいそうに。どこにいるんじゃない？」

「わかりません。真つ暗闇のなかで、道がわからなくなってしまったんです」

(間……)

「だが、ランプはどうした？」

「消えました」

(間……)

「※川はどーじゃ？」

「いなくなりました」

(間……)

「ああ、アクセル！ かわいそうに。元気を出すんじゃない！」

「いや、もうだめです。ぼくはすっかり力を使い果たしました。答える元気がありません。だから、ちょっと待つてください。でも、叔父さんのほうは、ぼくに話しかけてください」

(間……)

「元気を出せ！ いや、答えてもいい。わしが話す。わしらはおまえを探して、地下道を何度ものぼったり降りたりした。だが、見つけることはできなかった。おお、おまえがいなくなったのを知つて、わしがどんなに心を痛めたことか！ 結局、おまえが見つからないので、わしらはおまえがハンス川に沿つて進んでいるものと考え、下に降りることにした。おまえに聞こえるかと思つて、銃じゅうを何度かぶつ放したりしてな。いずれにせよ、この地下道の音響効果のせいで、わしらは今、こうして互いの声を聞けるようになった。といっても、まだ互いの身体に触れることはできないが……。だが、アクセル、絶望してはいかん。こうして、話ができるだけでも、たいしたことなのじゃない……」

そうやって、叔父が話している間、私は考えた。すると、小さな希望が——希望とは言えないくらい、かすかなものだつたが——そんな小さな希望が心に芽生えてきた。⁽⁵⁾この希望にすがってみよう。私は思った。だが、そのためにはせひとも知っておかなければならないことがある。私は壁に唇くちびるを寄せて、言った。

「叔父さん」

(間……)

「なんじゃ？」しばらくして、返事が戻ってきた。

「最初にぼくたちがどのくらい離れたところにいるのか、知らなくてはなりません」

(間……)

「そうじゃな。知るのは簡単じゃ」

「精密時計は持っていますね」

(間……)
「持つておるよ」

「それでは、時計を出して、秒針が12のところに来た時に、ぼくの名前を呼んでください。その言葉が聞こえたら、ぼくもその名前を繰り返します。で、ぼくの返事が聞こえたら、その時の秒針の位置を確かめてください」

(間……)

1

が、わしの声がおまえに届くまでの時間「というわけじゃな？」

「わかったよ。」

「そのとおりです」

(間……)

「用意はいいか？」

「はい」

(間……)

「よし、行くぞ。これから、おまえの名を呼ぶからな」

私は壁に耳をつけた。まもなく、「アクセル」という言葉が聞こえてきた。私はすぐに「アクセル」と返した。そして、待った。

(間……)

「四十秒じゃ」叔父の声が聞こえてきた。「わしがおまえの名を呼んで、その名前がおまえの口からわしのところに返ってくるまでに四十秒かかった。ということは、わしの言葉がおまえに届くには二十秒必要だったということじゃ。音は秒速約三百三十メートルで進むから、この二十秒を距離にする、六千六百メートル。つまり、わしらの間は六・六キロメートル離れているということになる」

「六・六キロメートル」私はつぶやいた。

(間……)

「大丈夫だ、アクセル。そのくらいの距離は乗りこえられる」

「でも、のぼるんですか？ 降りるんですか？」

(間……)

「降りるんじゃ、アクセル。その理由を説明しよう。わしとハンスは今、広い洞穴^{ほらな}にいる。この洞穴にはあちらこちらから地下道が集まってきて

いるのじゃ。だから、今、おまえがいる地下道もこの洞穴につながっているにちがいない。というより、この洞穴から生じたひび割れが地下道になったと考えたほうがよい。だとしたら、このあたりの地下道がこの洞穴に集まっているのは当然のことなのじゃ。だから、アクセル、勇気を持って、立ちあがれ！ まずは歩け！ 歩けなかつたら、這^はつてもいい！ 必要だつたら、坂をころがり落ちよ！ そうしたら、その先にはわしらが腕^{うで}を広げて待っている。おまえを抱^だきとめるためにな。だから、進め！ アクセル。進むのじゃ！」

その言葉に、私は勇気づけられた。

「じゃあ、行きます」私は叫んだ。「この場所から離れたら、二度と言葉を交わすことはできないでしょうが、でも、行きます。さよなら。叔父さん、さよなら」

(間……)

「またじゃ！ アクセル！ またじゃ。アクセル！ またな」

この叔父の言葉を最後に、私は出発した。かすかな希望とともに……。

しかし、六キロメートル以上も離れている場所で、互いの姿も見えないのに、話ができるとは！ そのことを思うと、私は神に感謝の祈^{いの}りを捧^{ささ}げた。というのも、神はこの地下にはりめぐらされた巨大な迷路^{めいろう}のなかで、たまたま叔父たちの言葉が届く場所に私を導いてくれたのだから……。

おそらく、そんな場所はほかにはなかつたらう。そのたつたひとつの場所に、神は私を連れていつてくれたのだ。

ところで、空間を伝って、かなり離れた場所に声が届くというのは、確かにびっくりするような音響効果ではあるが、物理学的には不思議なことではない。こういった地下道では、音は空間の形と、その空間を囲む岩の性質で、伝わりやすさ^さが決まるのだ。こんなふうに、声が近くににいる人には聞こえないのに、離れた場所にいる人には聞こえるという例なら、私は嫌^{いや}というほど知っている。ロンドンのセント・ポール大聖堂の《ささやきの回廊^{かいろう}》もそうだし、シチリア島のシラクサの近くにある石切り場のなかでも、同じような現象が見られる。かつては牢獄^{ろうごく}であったこの石切り場では、[※]僧主^{せんしゅ}ディオニュソス^{ディオニュソス}がその特殊な音響効果を利用して、囚人^{しゅうじん}たちの話を盗^{ぬす}み聞きしたという。そのため、この牢獄には《ディオニュソスの耳》という名前がつけられているのだ。

そういった知識を思い出すと、私はだんだん、なんとかかなりそうな気がしてきた。叔父の声が私に届くということは、私たちの間には障害物が無いということだ。つまり、「音の通った道」に従っていけば、私もまた叔父のところに着けるということになる。あとは体力がもつかどうかと

うだけの問題だ。^⑥私は立ちあがった。そして、くだりの坂道を歩くというよりは、駆けるようにして降りていった。坂はそれほど急だったのだ。靴の底で勢いを止めながら、私は進んでいった。

そのうちに、坂をくだる速度が速くなり、降りているのではなく、落ちていくという感覚に近くなってきた。私はもはや勢いを止めることができなかった。

こうして、どのくらい降りつづけたろう。気がつくやうに、突然、足の下から地面がなくなり、私は自分があちこちの壁にぶつかりながら、落ちていくのを感じた。そこはもう道ではなかった。堅穴^{たてあな}だった。と、頭が岩にぶつかって、私は意識を失った。

(ジュール・ヴェルヌ作 高野優訳 『地底旅行』より)

※花崗岩……マグマが固まってできた非常に堅く頑丈な岩。

※《フルーラッド》という単語はデンマーク語だ……ハンスはドイツ語を話せないため、叔父とハンスはデンマーク語で会話をしている。

※川……数日前、ハンスが壁を掘ったところ湧き水が見つかり、その流れが小川となった。一行はその小川をハンス川と名付け、それに沿って旅を続けていた。

※僧主……非合法手段で支配者の地位についた者。

問一——線①③のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。漢字は一画ずついていねいに書くこと。

問二——線①「自分はまだ、これから死ななければならないのだ」とありますが、このときの「私」の心情はどのようなものですか。説明したものとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ランプや時計が壊れ光も時間も失ってかたてない恐怖と孤独に包まれるなか、自分がこのまま死んでしまうのではないかとおびえている。
イ 暗闇のなかで血と涙に濡れながら苦しむ状態が永遠に続くのではないかとということが恐ろしく、今すぐに死んでしまいたいと願っている。
ウ 叔父たちから見捨てられたことでこの上ない孤独に襲われ、このような状況で意識が戻ってきたことに対して残念に感じている。

エ 意識は戻ったものの身体が血でべとべとになっていることにおのき、時間も分からぬまま孤独に死んでいく不幸な身の上を嘆いている。
オ 意識が戻ったがためにやがて訪れるであろう死への恐怖に襲われつづけることになり、自分の置かれた状況を耐えがたく思っている。

問三——線②「大きな音」とありますが、この音の正体は何ですか。漢字二字で答えなさい。

問四——線③「数秒が数世紀のように感じられた」とありますが、このときの「私」についての説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 叔父からの返事が来ないかもしれないという不安と、間があつたとしても返事が来るのではないかという期待とが、心の中でせめぎ合っている。
イ 叔父からの返事が来ることを信じているが、なかなか返事が戻ってこないことに大きな不安を覚え、いらだちを抑えることができず我を忘れている。
ウ 叔父からの返事が来るかどうか自信が持てず、叔父たちとの再会の望みも地上に戻る望みも失ってしまい、絶望のあまり時間の感覚を失っている。
エ 叔父からの返事が来ることに希望を抱くあまり、早く叔父たちと再会したいという気持ちばかりが先走ってしまい、状況を冷静に見極めることができなくなっている。
オ 叔父からの返事が来ることをほぼ確信しているが、予想よりも時間がかかっているため、もし返事が届かなかった場合にどうするべきかを必死で考えている。

問五 ――線(4)「アクセル！ アクセル！ おまえか？」とありますが、これ以降の会話からリーディングブロック叔父さんのどのような様子が見えますか。その説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア アクセルのことを心配するあまり、後先を考えずに自分たちに都合の良い条件ばかりを選択して、アクセルに無理をさせようとしている。
 イ アクセルのことを心から案じており、論理的な判断を示すとともに前向きであたたかな言葉をかけ、アクセルを勇気づけようとしている。
 ウ アクセルの無事をにわかには信じていることができず、不安になるアクセルを励ますことによって、自分自身のことでも鼓舞しようとしている。
 エ アクセルの無事を非常に喜んでおり、アクセルを激励しながら、具体的な救出方法をハンスと一緒に考えたと必死になっている。
 オ アクセルの無事に驚くあまり、アクセルを励ますことしかできず、今後の方針についてはアクセルの言うことに任せきりになっている。

問六 ――線(5)「この希望にすがってみよう」とありますが、ここでの「希望」とは、叔父たちとの再会についての「希望」だと考えられます。ここで「私」が叔父たちと再会できるという判断を下したその根拠は何ですか。三十一字以上四十字以内で説明しなさい。

問七

 に入るのにふさわしい表現を考えて三十一字以上四十字以内で答えなさい。

問八 ――線(6)「私は立ちあがった」とありますが、この場面での「私」についての説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 叔父と話せる場所にいたことは神からのすばらしい恵みのように思えたが、よく考えてみるとそのような場所はどこにでもあるということに気づき、無事に帰還できるかどうかは結局のところ運ではなく自分の体力次第のだと冷静に状況を判断するようになっていく。
 イ 離れた場所にいる叔父の声が聞いたこと、それと同じ原理が働いているであろう《ささやき回廊》や《ディオニエウスの耳》といったよく知られている事例を思い出したことを神に感謝し、困難な状況を自らの手で打開しようという勇気がわいてきている。
 ウ 何キロも離れたところにいる叔父と話ができるという自然の神秘に感動するとともに、それが昔から色々なところで起きていた現象であるということに思い返して、自分が叔父と再会できる可能性もかなり現実的なものに見えるようになっていく。

エ 叔父たちの言葉が届く場所にいたことを幸運に思いつつ、離れた場所に音が届くことは物理学的には珍しい現象ではないということに

思い至り、その音をたどっていけば体力次第で叔父たちとの再会が可能はずだという希望を抱くようになっていく。

オ 叔父の声の届く場所に倒れていたことを神の決めた運命だととらえ、音の通ってきた道に従って歩いていけば叔父たちのところにたどり着けるにちがいないと考えることによって、自分を奮い立たせ体力を回復しようと考えているようになっていく。

二 次の記事を読んで後の問いに答えなさい。

「人間は生きものであり、自然の中にある」。これから考えることの基盤はここにあります。これは誰もがわかつていることであり、決して新しい指摘ではありません。しかし、現代社会はこれを基盤にしてでき上がってはいません。そこに問題があると思い、改めてこのあたりまえのことを確認するところから出発したいと思います。

まず、私たちの日常生活は、生きものであることを実感するものになっているでしょうか。朝氣持よくめざまめ、朝日を①アビ、新鮮な空気を体内にとり込み、朝食をおいしくいただき……これが生きものの暮らしです。めざまし時計で起こされ、お日さまや空気を感ずることなどまったくなしに腕の時計を眺めながら家とび出す……実際にはこんな朝を過ごすのが、現代社会の、とくに都会での生活です。ビルや地下街など、終日人工照明の中で暮らすのが現代人の日常です。これでは生きものであるという感覚は持てません。

生きものにとつては、眠ったり、食べたり、歩いたりといった「日常」が最も重要です。ですから、その日常のあり方を変革し、皆があたりまえに自然を感じられる社会を作ればよいのですが、ここまできた近代文明社会を一気に変換するのは難しいでしょう。

そこで、ここでの提案は、まずは一人一人が「自分は生きものである」という感覚を持つことから始め、その視点から近代文明を転換する切り口を見つけ、少しずつ生き方を変え、社会を変えていきたいと思います。一人一人の気持が変わらないうまま、たとえばエネルギーだけを脱原発、自然再生エネルギーに転換と唱えても、今すぐの実現は難しいでしょう。しかもそれはあまり意味がありません。自然エネルギーを活用する「暮らし方」が大切なのであり、その基本が「生きものである」という感覚なのです。

近代文明をすべて否定するのではなく、生きものとしての感覚を持てるようにするところから転換をはかろうとするなら、生物学に大事な役割を果たせるはずと考えています。なぜなら私自身この分野で学んだがゆえに、とくに意識せずに「生きものである」という感覚を身につけることができ、日常をそれで生きていけると実感するからです。簡単な例をあげるなら、購入した食べ物が賞味期限を越えてしまったような時でも、それだけで捨てることはできません。まだ食べられるかどうか、自分の鼻で、舌で、手で確認します。

鼻や舌などの「感覚」で判断するとはなんと非科学的な、そんなことで大丈夫なのか、もっと「科学的」でなければいけないのではないかと

言われそうです。科学的とは多くの場合数字で表わせるということです。具体的には冷蔵庫から取り出したかまぼこに書かれた日時をさすわけです。衛生的な場所で製造されお店に出されていると信じ、安全性の目安として書かれている期限を見て、その期間に食べているわけです。それを科学的と称しているけれど、これでよいのでしょうか。こうした判断のしかたは、私には、自分で考えず科学という言葉に任せているだけに思えます。②「科学への盲信」で成り立っているように思います。

もちろん、「感覚」だけではわからないことがたくさんあります。科学を通じて微生物による腐敗や毒物の生成などの危険性を知り、それに対処することは重要です。しかし、賞味期限内であれば危険はなく、それを過ぎたら危険と、数字だけできるものではありません。科学的な知識があつたとしても、毎日の生活の中で自分で病原菌や毒物を検出し、その食べ物が危険かどうかをチェックするわけではないのですから、科学による「保証」の限界を知ることが大事です。

食べ物を自らの手で作ったり、採ったりしていた時代には、安全性については自分で責任を持つしかありませんでした。科学・科学技術のおかげでより進歩した暮らしやすい生活ができるようになり、安全が保証された形で、食べ物が手に入るようになったのはありがたいことです。でも、そこに期限をきめる数字が③インサツされるようになると、それに振り回され、それに従うことが正しい暮らし方ようになってしまいました。自分ではまったく科学に触れているわけではなく、時には科学的な考え方をすることもなく、ただ「科学が保証してくれているはず」という雰囲気の中で何も考えずに数字を鵜呑みにしているのです。そうではなく、生きものであることを忘れずに、その力を生かすことが必要であると思うのです。

ネズミやイヌなど他の生きものに比べたら嗅覚などはかなり感覚が悪くなっているとはいえ、私たちの五感はいいセンサーです。もちろん、上手に使っていないと鈍くなるので、感覚を保つためにも日常その力を生かすことは大事です。科学を知ったうえで、機械だけに頼らず生きものとしての自分の感覚をも活用するのが、私の考えている「人間は生きものである」ことを基本に置く生き方です。科学的とされる現代社会のありようは実は他人任せなので、これは「自律的な生き方」をしようという提案でもあります。

うっかり期限の過ぎたかまぼこをすぐには捨てずに鼻や舌を使うという小さなことですが、一事が万事、この感覚を生かすとかかなり生活が変わり、そういう人が増えれば社会は変わるだろうと思うのです。常に自分で考え、自身の行動に責任を持ち、自律的な暮らし方をするのが、私の考える「生きものとして生きる」ということの第一歩です。

【中略】

近代をどこからと見るかは諸説ありますし、日本について言うなら明治維新以後の西欧文明の移入以降を扱わなければならないのですが、ここで考えたいことは生命・人間・自然・科学・科学技術であり、しかも私のかなり個人的な見方を語るようになりますので、戦後、とくに二〇世紀後半の、分子生物学と呼ばれる新しい生物学が誕生して以降の時代を見ていくことにします。

③この時代、私たちが求めてきたものは何よりも、「便利さ」と「豊かさ」だったと言つてよいでしょう。まず、家庭の中に入ってきたのが洗濯機、電気冷蔵庫、テレビ（モノクロ）で、三種の①と言われました。タライを使って子どもたちが汚してきたシャツからシャツまで手洗いしていた女性にとって、スイッチ一つで汚れを落としてくれる洗濯機は夢の道具でした。便利さの象徴です。冷蔵庫も然りです。その後三種の①は三〇と呼ばれるカラーテレビ、自動車、空調機になりました。便利さは、ぜいたく気分へと移行したのです。

ここで言う「便利さ」「豊かさ」は物が支えてくれるものであり、物を手に入れるためのお金が豊かさの象徴となりました。便利さとは速くできること、手が抜けること、思い通りになることであり、さまざまな電化製品、自動車や新幹線などの交通手段、携帯電話、その他諸々、次々と開発された機器はさらなる便利さをもたらし、それらの製品を生産する産業が活発化することで経済成長、つまりお金の豊かさが手に入りました。私たちはこのような変化を進歩と呼び、そのような社会を近代化した文明社会、つまり先進国の象徴として④ビヨウカし、この方向での拡大を求めたのです。

しかし、「人間は生きものであり、自然の中にある」という切り口で見た時、この方向には大きな問題があり、見直さなければなりません。なぜなら、それが※前節で述べた生きものとしての特徴と合わないところが多いからです。

速くできる、手が抜ける、思い通りにできる。日常生活の中ではとてもありがたいことですが、困ったことに、これはいずれも生きものには合いません。生きるということは時間を紡ぐことであり、時間を飛ばすことはまったく無意味、むしろ生きることの否定になるからです。

同じように、「手が抜ける」も気になります。手②にかけるという言葉があるように、生きものに向き合う時は、それをよく見詰め相手の思いを汲みとり、求めていると思うことをやってあげられる時にこそ喜びを感じます。野菜づくりを趣味にしている、④ある会社の社長さんが、「④ビヨウウや水じゃないんだよ。毎朝この機械はどうかかと声をかけてやればおいしいトマトができるんだ」と話す時の顔は、経営について語る時のそれとは違い、なんとも柔和です。日常は厳しいけれど、その底にはこのような生きものへの眼があるのだと思うと安心します。

（中村桂子『科学者が人間であること』より）

※前節……【中略】の部分に含まれる一節を指す。

問一——線①～④のカタカナを漢字に直しなさい。漢字は一画ずついいねいに書くこと。

問二——線①「今すぐの実現は難しいでしょう」とありますが、筆者がそのように述べるのはなぜですか。三十一字以上四十字以内で説明しなさい。

問三——線②「『科学への盲信』」について、次の（１）（２）の問いに答えなさい。

（１）これについての説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 生きものが持つ「感覚」を重視することを野蛮だと考えるような人びとが、科学的に示された数値に対してのみ全幅の信頼を寄せてしまふということ。

イ 生きものとしての「感覚」を使わなくなってしまった人びとが、あくまで目安でしかない科学的な情報を絶対視しそれに翻弄されてしまふということ。

ウ 科学についての知識を習得していない人びとが、安心を得るために科学者の意見をそのまま信じこみそれに従って行動してしまうということ。

エ 「生きものである」という感覚を失ったことを自覚している人びとが、科学的な知識だけを絶対的な根拠であるとして物事を判断してしまふということ。

オ 生きものとしての生き方をしていただけでは正確な判断ができない部分があると考えていた人びとが、科学技術に頼るようになってしまふということ。

(2) 筆者は「『科学への盲信』」に基づき、生き方を批判的にとらえ、別の生き方をすべきだと考えています。筆者が考える理想的な生き方とはどのような生き方ですか。五十一字以上六十字以内で説明しなさい。

問四 — 線(3)「この時代、私たちが求めてきたものは何よりも、『便利さ』と『豊かさ』だった」とありますが、これはどういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 近代以降、人びとは自分の生活を思い通りにするために技術の向上を追求し、その過程でお金を得ることもできたということ。
- イ 西欧文明の移入以降、人びとは誰でも簡単に扱えるような機械を必要とし、それを得ることで心が満たされたということ。
- ウ 戦後、人びとは素早く楽に物事を実行できることを望み、それを叶えるための経済力を欲したということ。
- エ 二〇世紀後半、人びとは仕事の役に立つものを欲し、それを手に入れたことで金銭的に満足できるようになったということ。
- オ 新しい生物学が誕生して以降、人びとはぜいたくをして生きることが目標とし、それを達成するためにはお金が必要だったということ。

問五 1 には漢字二字、2 には漢字一字が入ります。ふさわしい漢字をそれぞれ考えて書きなさい。

問六 — 線(4)「ある会社の社長さん」とありますが、この「社長さん」のエピソードを通して、筆者はどのようなことを述べようとしていますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間は自分のためではなく相手のために何かをしてあげることによって幸せを感じるため、人間は自然の中で周囲との関係を構築しながら生きていくと意識して、時間をかけて思いやりの気持ちを育んでいくべきだということ。
- イ 他の生きものと比べて人間は特別であるという自己中心的な考えを持つことなく、人間も生きものの仲間であることを常に意識して身近にある自然を大切にしながら生きていくべきだということ。
- ウ 人間の意に沿わない生きものを排除したり無理やり人間の思い通りにしたりするのではなく、いつくしむ心を持ち、大切な家族などに接するような気持ちで向き合うことで、相手からの見返りを得られるということ。
- エ 人間は生きている限り幸せを追い求め、向上心を持って生きていくべきであるが、いくら社会的地位を高めて経済的に豊かになっても精

神的な豊かさがなければそれは幸せとは呼べないということ。

オ 人間は効率の良さを重視するのではなく、自分が生きものであるということを忘れずに、自然のなかで生きているということを実感しながら時間と手間を惜しまずに生きていくのがよいということ。

(問題は以上です)

国語解答用紙

渋谷教育学園渋谷中学校

※らんには記入しないこと

受験番号				
氏			名	

合計得点	※
------	---

問一	①	
	②	
	③	

問二	
----	--

問三	

問四	
----	--

問五

[illegible][illegible]

問八	
----	--

問一	
①	
②	
③	
④	

[illegible]

問二	(1)	
----	-----	--

[illegible]

問四

問五
1

2

問六

5

6



5

5



5

503

